



第2回 クラスの小さな仲間たち

2年2組に、クラスの子が捕まえてきたトノサマガエルがやってきました。

担任の先生も子どもたちも、「すごい!」「大きい!」と興味深そうにトノサマガエルを見ていました。

カエルは私の一番好きな生き物です。

今回は新しく2組の小さな仲間になったトノサマガエルについてお伝えいたします。



トノサマガエルの魅力①「かっこいい」

長くしなやかな足、金色の目につんととがった鼻、緑色を基調とした斑模様、なんといっても大きな体。田んぼの近くで出会えるカエルは数種類いますが、在来種のカエルの中で最も大きく、最もかっこいいカエルだと思います。(山の方に行くとまた別の大きいカエルやかっこいいカエルがいますが・・・)

トノサマガエルの魅力②「捕まえるのが難しい」

その長い脚は、トノサマガエルに驚異的な跳躍力と遊泳力をもたらします。もし、見つけても、あっという間に水中に飛び込んで、泥の中に隠れてしまいます。その色と模様から動かないと全く見つからない上に、警戒心が強いので少し近づくとすぐに跳んでにげてしまいます。捕まえるのが難しいカエルだからこそ「トノサマ」の称号をもち、子どものあこがれの存在になっているのでしょう。



この色と模様で茂みにいると全然見つけられません

トノサマガエルの魅力③「飼いやすい」

カエルは丈夫なので、水さえあれば子どもが飼育してもすぐに死んでしまうことはありません。しかし、エサが生きた虫という点が飼育のハードルを高くしています。アマガエルのような小さなカエルだと、エサを用意するのも一苦労です。その点トノサマガエルは体が大きく、ダンゴムシやバッタなど、子どもが捕まえられる虫をエサにすることができます。(わりと獰猛なのでエサをいれるとすぐに食いつきます)

教材としてのトノサマガエル

生き物好きとしてではなく、教師としてトノサマガエルは飼育・観察対象としておすすめすることができます。環境学習や理科学習のよい教材であるからです。

現代の稲作とカエル

以下のような稲作様式の変化が、現在のカエルの生態に大きな影響を与えています。

- ①農薬の使用
→幼生であるオタマジャクシが死んでしまう
- ②農法の変化による冬期湛水（冬水田んぼ）の消滅
→冬から春にかけて産卵するカエルが、産卵場所を失う
- ③畔や水路のコンクリート化
→冬に土の中で冬眠するカエルの冬眠場所が減少する

特に②は影響が大きく、1月～2月に産卵するアカガエルは産卵場所が少なくなり、全国的に数を減らしてしまっています。

トノサマガエルの産卵時期は4月～5月ごろで、この時期に田んぼに水を張る地域では、トノサマガエルは多く繁殖します。環境省で準絶滅危惧種に指定されているトノサマガエルが、愛知県では絶滅を危惧されるほどの状況ではないのは、愛知県の米作りがトノサマガエルの産卵時期とちょうど合っているからだと考えています。

生態ピラミッドの要

中間捕食者であるカエルは、小さな生き物を食べる側でもあり、より大きな生き物に食べられる側でもあります。

しかも一度に大量に生まれるので、オタマジャクシは水棲昆虫や大型の魚、カエルは鳥やヘビなどの捕食者の食料源であり、生態系を支える存在と言えます。

カエルが数を減っているということは、その地域全体の生態系が崩れ始めているということなのです。



両生類という不思議な生き物

カエルやイモリなどの両生類は本当に不思議な生き物です。水の中で生まれて、エラ呼吸で育ち、変態すると肺呼吸に変わります。カエルは手足が生えたり、尾がなくなったりします。食性も雑食から完全肉食に変わります。呼吸器官や消化器官が変化し、体の部位が増えたり減ったりするなんて、昆虫もびっくりの驚きの変化です。

トノサマガエルはオタマジャクシもかなり大きくなるので、こういった変態の様子も観察がしやすいです。（現在2年生でトノサマガエルのオタマジャクシを飼育しているので、ご家庭で飼ってみたい方は、岩本にお声かけ下さい）

4月に4年生が作ったSOLANのビオトープで、トノサマガエルが産卵をしました。昨年、一昨年と地域でとれたトノサマガエルのオタマジャクシを飼育、放流していたので、その子たちが卵を産みにきたのかもしれない。SOLANの自然環境が充実し始めているのを感じた一場面でした。